

沈黙の形 — 丸山雅秋氏への手紙

酒井忠康（美術評論家）

あなたの作品について考えようとする、あなたに初めてお会いした日のことが思い浮かぶ。私にとって、といってもいいくらいに、いまでもありありと思い出すことができます。

人間の記憶というのは、印象の発端をどこに置くかで、その後、作家とのつきあいとか、馴染みの感情を寄せる、その寄せ方が違ってくるということを私は体験してきました。ブランクシーのような彫刻家には、いまだ生地ゆかりのトゥルクジュ（ルーマニア）を訪ねないことで、憧れを遠くに置いてきましたし、ヘンリー・ムーアやバーバラ・ヘップワースのような場合は、むしろ逆で、彫刻家の生地や縁ゆかりの場所と徹底的に馴染むことで、彼らの創造的契機きげんの一端に触れることを可能にしました。

私があなたにお会いしたのは、あなたの郷里の信州（長野県豊科町）でした。郊外のアトリエに案内されて、そこであなたの作品に接したのですが、そのとき、なぜか一瞬、時間が止まったようなシーンとした気分を味わった。都会の喧騒から離れた場所で作品をみるのは、決して珍しいことではないが、どことなしに、のんびりとした雰囲気ふんいきのなかにいる自分に気づいた。おそらく、これはあなたの作品（彫刻の性格）に誘われたせいだろうと思っています。

矩形のブロンズの塊が、ただ一個、そこにあるといたげな作品を眼にした。私は手に触れながら、その感触をたしかめていた。縦に積み上げたもの、あるいはタイプの違った矩形を、二個あるいは三個、列状に並べた作品がありました。特に面白いと思ったのは、矩形の別々のブロンズが結合している作品でした。僅かな切込の線が元の形を暗示させていて、上手いなと思いました。

余計なものを一切とりのぞき、それでいながら作家の手が、その矩形のブロンズの表面や角張ったところをさす摩さっているような柔らかさなめらかさがあって、焼き物の肌合いや年期を刻んだ黒っぽい家具の感触を思い出させるところがありました。一気に抽象へと向かわないところがいい。そのところの計量の物差しは明白ではないけれども、以前に送っていただいた個展のカタログなどをみて、あなたの80年代後半の仕事を推察すると、具象の人体像に馴染んだ経験が暗々裏に作用していることを教えます。そうした柔らかさの感触というのは、一見、自然発生的で無意識の行為のなかに生まれるように思うけれども、彫刻家の場合にはもっと意志的な要素をそこに認めることができるかもしれない。

どちらにせよ、これは人間と自然との回路^{サーキット}を微妙なかたちで取り付ける、あなたの工夫が、実にそれとない仕方で加えられているからこそ可能なことであって、幾科学的な責め方だけでは不可能なのではないか、と私は思いました。

幾科学的な図形によった折り紙の小舟を開くと、一枚の平たい紙にもどるけれども、自分は蕾が開いて花となるような、そうした「展開」^{デベロープメント}の仕方を望みたい、と書いていたのは、ヴァルター・ベンヤミンというドイツの思想家です。私はあなたの作品をみていて、このベンヤミンの言葉を想起し、同時にあなたの彫刻の共感を見逃さない、あなたの人柄一端が、それとないかたちで表現されているからではないか、と。これは水彩画のような優しさではないけれども、ただそこにある一つまり、石のような塊が暗示するところの一個の存在といえるもので、優しさというよりは沈黙（ないし沈黙の形）といったほうが適切かもしれない。

いずれにせよ、この言葉の一切と結びつく時間の経過に、彫刻家がはたしてどこまで付き合い得るのかを私は考えていました。が、この種の問いにあなたならどう答えるだろうか、と思ったときに、私はまた、いつもの批評家のわるい癖が出てしまったと気づいて、その疑問を打ち消したのです。彫刻家の創意に踏み込んでいちいち質すこともたまにはありますが、私はあなたのアトリエではどこかモヤッとした気分のなかにいたと思ったのです。ですから、ただ右往左往して作品をみていたのではないか、そんな気がします。

アトリエ訪問は、二年前の5月下旬のことでした。ひんやりとした肌寒さを感じさせる季節でした。山々も薄緑に変わっていて、自然の変化の循環に立ち会うことのできるもっとも鮮やかな季節でした。たまたま私の友人 I 氏の美術館が穂高にオープンし、その開館記念式典に参加した夜、ホテルで私はあなたの奥様から一通のメッセージを受け取ったのが、知り合うきっかけとなったのでしたね。翌日、昼過ぎまであなたのところでご厄介になりましたが、とても感じのよい一刻を過ごすことができました。彫刻についての話題に花が咲いて、随分と長時間話し合ったように記憶しましたが、けっして窮屈な理論には陥らなかったし、日本語とドイツ語と英語、そして時々イタリア語が混じったりして賑やかな感じでしたね。

ただ、ひとつだけ私が気になったのは、あなたが暫く製作を中断していて、虚のなかから生じてくる一種の影のようなものに誘われているらしいと疑ったことでした。中断というのは、しばしば、新しい出発のための休息となりますから余計な心配だったかもしれませんが、まあ、彫刻のような具体的な物体と毎日付き合っていると、時には、何もない空っぽの世界へと、ふっと出て行ってしまいたいというような衝動に駆られたとしても可笑しくない。虚のなかから一といったのは、その空っぽの世界ということに近く、ジャコメッティだって、シュルレアリ

スムの彫刻を捨てて、あの限りなく細い彫刻になったのは、空っぽの世界つまりは虚のなかから生じてくるところの影に誘われたからなのですよ。してみれば、ちょっと心配をしたあなたの影の領域との対話だって、創造のための契機をもとめて制作の手を休めていただけで、それは私の杞憂に過ぎないのかもしれない。『マルテの手記』の詩人がロダンの工房から誕生したことを思い出します。優れた感性の持ち主が自らの魂に刻む創造のための痛みにも似て、それはまあ、一種の産みの苦しみとっていいのかもしれませんが。詩人は世界の変化をここに刻み、素材の言葉を駆使するけれども、彫刻家のように世界を変えようとしたのではない。私はあなたの中に沈黙の形を見たように思いました。

イルムトラウト・シャルシュミット＝リヒターさんは「海外での生活がどれほど長くても、自国の文化に深く根付いた芸術家がいるものだ」として、あなたが自己の根を断ち切らないでいることを個展テキストで書いていました。まさに虚のなかから一というのは、この自己の根とかかわるもののようなのだとっていい。なぜなら芸術家というのは外なる現実と戦うよりも自分自身の内なる現実の手を焼くものだからです。私はあなたが西洋的なものから日本的な雰囲気をもつものへの、つまり、あなたの内なる気象の変化に気づいたのが、いかなる理由によったのかを知らない。

彫刻は空間とかかわり、未来を指向するとすれば、あなたはどこかでこの方向に疑念を抱いたはずだ、と考えるのは自然かもしれませんが。人生についての思惟というのは時間の意識（記憶）とかかわるので、しばしば仕事を中断し、それ相応の思索の時間を要したのも当然のことだろうと思います。

出合いの最初を決定的にしたのは、あなたの作品が私を捉えたということです。このことは間違いではない。私の印象の内面的な理由を語るのは簡単ではないけれども、私の好みの彫刻であったことはたしかで、率直にいいなと思ったのです。だからこそ、あなたの作品がどんな空間にあるべきかを想定し、あなたの彫刻の持っている遠心性を予測して、さまざまに外在的な世界との関連を仮想したりもしたのです。しかし、いかにもあなたの彫刻らしく、それ自体の宇宙を持ち、いたずらに外に向かって拡大することを阻む性質を持っていました。それ相応の大きさにおいて、あなたの彫刻が魅力を発揮するのは、あなたの天性の計量の物差しのせいなのでしょう。派手さを抑えて密かなるところみに満ちたあなたの彫刻の身振りに、私は感銘を覚えるものがあつた、とだけ最後にいっておきたい。

今度の個展の成功をここから祈っています。